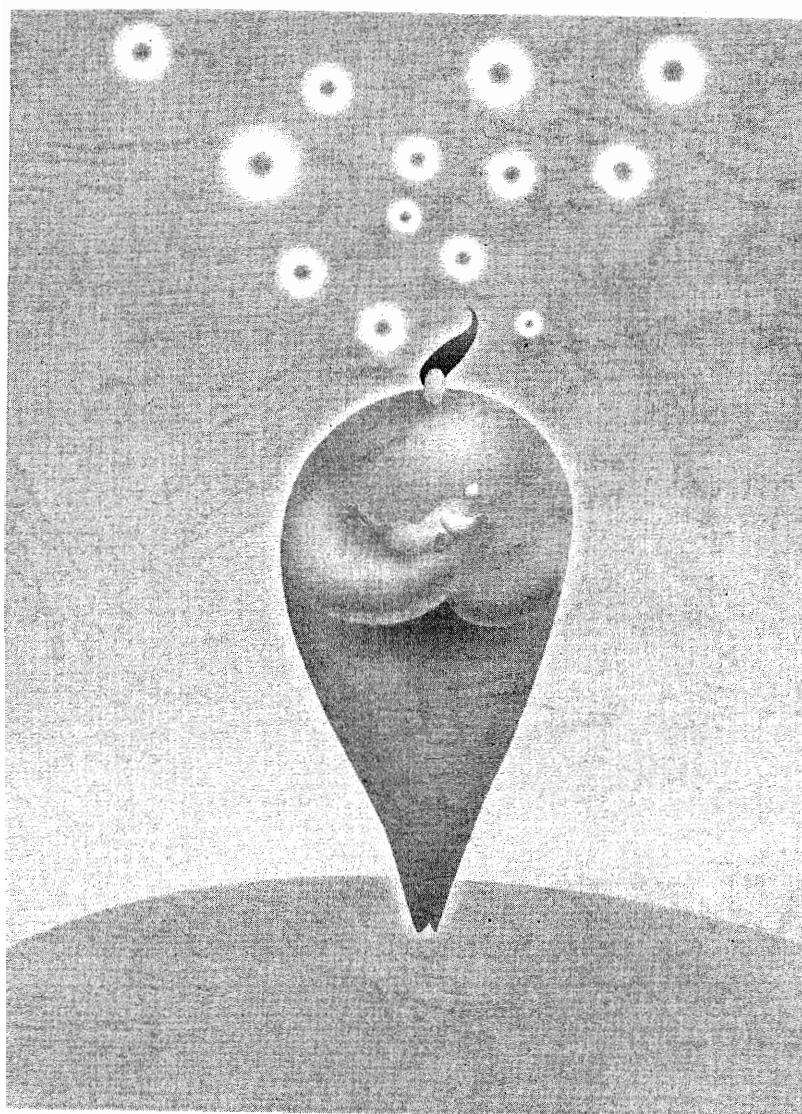


人権読本

『ぬくもり』の研究と指導

小学校5・6年編

改訂版



福岡市人権読本編集委員会編

題材設定の意図

戦後五七年（二〇〇二年現在）が過ぎ、現在の日本では戦争は過去のものとなり、現在を生きるわたしたちは、生きる権利―命―があることも当たり前のような感覚となってしまうている。しかし、世界の中には、現在も戦争が続いている国があり、生きる権利がおびやかされている地域がある。そのような中で、国境をこえて平和な世の中をつくるため、命を守るために活動する人々がいることを知ることは、自国の平和だけでなく、世界の平和や人の命について考え、平和な世の中をつくっていくという気持ちをもて育てることになると考える。

題材の解説

一九七九年十月の旧ソ連軍によるアフガニスタン侵攻以来、大量の難民が発生し、その数は約六百万人、その内パキスタン側に入っているのが三百万人以上と言われている。八九年にソ連軍が撤退を完了しても、内戦は収まらず米ソの武器援助が続いていた。そのような中、中村哲医師は十八年間ベシヤワールを本拠地にアフガニスタン・パキスタン両国で医療活動を続けてきた。

ベシヤワール会は、中村さんの医療活動を援助するためにつくられた団体で、本部は福岡にあり、その援助金ほとんどは募金でまかなわれている。この十八年の間に、中村さんたちは山岳部無医村地区の診療とハンセン病根絶のために、カブールの五診療所・アフガン山岳部の三診療所・パキスタン山岳部の二診療所とベシヤワールの基地病院を建て、治療にあたってきた。中村さんは、もともとキリスト教団

体の派遣でパキスタンに行ったが、後に独立している。宗教的な関係でいろいろな援助団体と現地の間では摩擦が起こることもあるというが、『他人の信心をとにかく言わず、良いことは立場を超えて協力する』というのが、中村さんの考えである。

長年の医療活動にはたくさんの苦労があり、特に医療器具の不足や設備の不十分さは深刻なものであった。また、日本との医療技術の違いも大きく、患者の治療だけではなく、診療員の養成コースなども開いている。現地の病院や診療所では、アフガニスタン・パキスタンの現地スタッフと共に日本人スタッフが診療にあたり、相戦う者同士が仲良く治療を受けることもあるという。

難民キャンプの生活は厳しいもので、常に死が隣り合っているが、そのような中でも人間らしさを失わず、助け合いながら生きる人々の姿を見ることが多い。教育制度は整っていないが、その地域全体の伝統や日々の生活を通して、家族のきずなを強め、共同体の中で必要な協力と生活の技術を教え、日々の折りは倫理教育そのものであると中村さんは言っている。そのような様子を見てきたことが長年の間医療活動を続けられてきた理由なのだろう。また、派遣されたボランティアワーカーの中には多くの若者がいるが、現地での活動や人々とのふれあいの中で大きく成長して帰ってくる人たちも多いという。

現地でももう一つの大きな問題は早魃である。本来は医者である中村さんたちも、派遣された日本人ワーカーと共に井戸を掘る活動が続けている。アフガニスタンの早魃のニュースはあまり報道されることはなかったが、これらの問題は地球温暖化の影響でもあると言われている。アフガニスタンの水源の大部分は、夏に溶け出すヒンズークッシユ山脈の氷雪である。それが異常気象で積雪が少なくなり、特に一〇〇〇年からは冬の降雪が激減し、銀白であるはずの山々は茶褐色の山肌をさらしている。

二〇〇一年十月のアメリカ軍による空爆で、アフガニスタンの早魃の被害はさらに深刻になっていった。そのような中、中村さんたちは

『命の基金』として、アフガニスタンへの食料配布を呼びかけ、多くの募金を集め食料配布を実現することができた。（一家族一〇人の一ヶ月の食料費がおよそ二〇〇〇円）また、現在六六〇ヶ所の井戸も今後は一〇〇〇ヶ所を目指して活動を続けていくということである。

この学習のねらいは、現在でも戦争があつて地域があることや、国境をこえて活動する人々がいることを知り、平和な世の中をつくることとする気持ちを育てることである。平和な世の中をつくるというところが、即戦地に行つて活動をするということだけにならないように留意したい。また、早魃の問題は遠いアフガニスタンの問題だけではなく、私たちの便利な生活の影響である地球温暖化にも起因していることも合わせて考えさせていきたい。まずは、自国のことだけでなく、外国のことについても興味を持ち、知ろうとするような気持ちを育てていきたい。そして、平和な世の中をつくるために、自分自身にできることを、身のまわりのことから考えさせていきたい。

アフガニスタンやパキスタンのことは地理的にもわかりづらいと思われるので、写真やビデオ等も利用しながら学習するのいいと思う。

参考

〈ベシヤワール会事務局〉

福岡市中央区大名一〇一五 上村第二ビル三〇七号

TEL 092 (731) 2372 FAX 092 (731) 2373

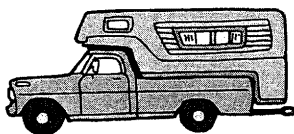
〈中村哲さんの著書〉

『ベシヤワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』『医は国境を越えて』

『医者井戸を掘る』（石風社）

※ベシヤワール会の活動を映したビデオがベシヤワール会にあります。

ベシヤワール会・・・中村哲さんの現地での活動を助けるためにつくられた団体で、本部は福岡にある。その援助金のほとんどは日本国内の募金でまかなわれている。現在の会員は四〇〇〇人をこえ、中村さんの支援だけではなく、ボランティアの人々の派遣もおこなっており、若い日本人たちが現地で活動している。



展 開 例

学習活動（主な発問と予想される子どもの反応）	指導上の留意点
1. 学習のめあてを確認する。 ○題名と本文7行までを読む。 ○学習のめあてを知る。 中村さんは、国境をこえてどんな活動をしたのでしょうか。	・地図で位置を確認させる。
2. 予想を出し合う。 ○国境をこえての活動でどんなことができるか、予想を出し合う。 3. 本文を読み、国境をこえて活動する人々のことを知る。 ○本文を読む。 ○アフガニスタンの内戦や難民のことに ついて知る。 ・アフガニスタンの内戦で、難民がパキスタンに入ってきていたこと ○中村さんの医者としての活動の様子を知る。 ・病院や診療所を建てたこと ・井戸掘りのこと ・食料配布のための講演活動をしたこと ○アフガニスタンの旱魃について知る。 ・雨が降らない ・水不足による被害 ・餓死の心配 ・空爆による被害の増加 ○中村さんの考え方を知る。 ・人権の中で最も重要なものは生きる権利 4. 学習のまとめをする。 ○学習を終わっての感想を出し合い、平和な世の中を創るために、どんなことが必要なのか、また、自分たちにできることは何なのか考える。 ・自分の国のことだけでなく、他の国のことも考えること ・自分の国のことや他の国のことをもっと知ること ・旱魃と地球温暖化の関係から、自分たちの生活を振り返ること ・募金活動などできることの協力 ○学習を終わっての感想を書く。	・自分で考えた予想を発表させる。 ・中村さんたちがどんなことをしたのか、考えながら読ませる。 ・山岳地帯であることや内戦・難民については補足説明する。 ・今の日本の様子と比べて考えさせる。 ・病院や診療所を建てたことや中村さんたちの思いに気づかせる。 ・18年間（2002年現在）も活動を続けることに気づかせる。 ・医者でありながら井戸掘りもしていることに気づかせ、その思いを考えさせる。 ・旱魃と地球温暖化との関係については補足する。 ・子どもたちの命がたくさん奪われていることに気づかせる。 ・現地で本当に必要とされることを手助けするのが援助であるという考え方も補足する。 ・中村さんたちの努力により、緑豊かな畑がもどってきていることに気づかせる。 ・中村さんたちのような国境を越えた活動が大切であることに気づかせる。 ・世界のことにについて知らないことがたくさんあることに気づかせ、調べようという意欲につなげる。 ・旱魃が自分たちの生活とも無関係ではないことから、身の回りのことのできることにについても考えさせる。 ・学習して思ったことや、これから自分がしようと思うことなどについて書かせる。

国境をこえて

日本から遠く八〇〇キロメートルもはなれたバキスタンと、アフガニスタンの国境近くに、ベシヤワールという町があります。この町を中心に、アフガン・パキスタンの二つの国で活やくする難民出身の医師がいます。名前は、中村哲さん。

中村さんがバグダッドを訪れた一九九三年ごろ、となりの国、アフガニスタンでは内戦があり、職いそぎながれて、三百万人以上の人々がバクスタンに入ってきてしまいました。塚げきて何が職業にあり、やごころ悪いで重傷になったりつく人々や、連れてくるのをちかえつた、またたりしなり、溺して死んでしまったる人々をかきうけたんです。中村さんは、これらの人々の治療にあたりました。

これらは国の山岳部には、病院もなく、医者もおらず、町の病院まで出てくるとは難しいことでした。患者が病院に来てれないのなら、医者の方が出かけて行くこと、中村さんたちは山岳部に降り、診療所をつくったのです。

二〇〇六年六月、中村さんは、バグダッドの山岳部に来ていました。そこには、治療を得ていた人の長い列があり、中には待つている間に死んでいくゆかい子ともがかえ、とほづにくれる若い母親の姿もありました。

いつものまなら、六月は田植える季節ですが、水田どころか、谷道をき行くと干季。なつた地面と水のない川が続いているばかりでした。飲み水さえ不足し、汚れた川の水を飲むことで疾病などの伝染病が流行したり、

千ばつのために砂漠化した村

中国
インド
アラビア海
パキスタン
アフガニスタン
イラン
カタール
オマーン
ウズベキスタン
タジキスタン

水がないことでは生きることができません。皮肉が加えられて、子どもたちの命は次々にうばわれていきました。

この惨状を見た中村さんたちは、「水不足あれば、飢饉や疫病もつきまわす。命は次々にうばわれることはいけず、干ばつが田畑もつるおいて、作物も育てられない。飢饉よりも命があることが先だ」と、アフガニスタンを去り、中村さんたちの呼びかけに集まったボランティアの人々や現地の人々と共に、井戸を掘り始めました。二〇〇三年までに掘った井戸は六〇〇ヶ所にもなり、今後は一〇〇〇ヶ所の井戸を掘る計画でした。

じつは、二〇〇一年九月のニューヨークでのテロ事件をきっかけとして、アメリカ軍によるアフガニスタンへの空爆が始まりました。干ばつの被害の上に、爆撃による被害が重なったのです。そのため、以前から問題だった食糧不足が、さらに深刻になりました。そこで

中村さんは、アフガニスタンの人々を何とか救いたい、日本にベシヤールを行き来しながら、日本各地でアフガニスタンの様子を伝え、募金をよびかけました。このよびかけにたくさんの方々が集まり、アフガニスタンの人々の食糧問題が実現したのでした。

「入隊の中でも最も重要なものは、生きる権利である。」「と中村さんは言います。わたし

たちには当たり前になっている、この生きる権利こそとおびやかされている地域が、世界中にはまだいくつもあります。この生きる権利、命を守る活動が、たくさんの方々の賛同と共に、今、アフガニスタン、パキスタン(SI)の国で、国境をえて広がっています。

募金する中村さん

完成した井戸

井戸掘りの作業

写真提供：ベシヤール会

67 国境をこえて 68 国境をこえて